

全面教育学研究会25周年記念集会・記録集

前編序の序文
地味に、25周年
1971年

1971年
1971年

記録集
1971年

全面教育 学の 現 在と未来

・「科学は、宗教と関係
・科学は、宗教と関係
・科学は、宗教と関係
・科学は、宗教と関係

科学とは何か
科学とは何か
科学とは何か

科学とは何か
科学とは何か

科学とは何か
科学とは何か
科学とは何か

科学とは何か
科学とは何か

科学とは何か
科学とは何か

全面教育学研究会

はじめに

本冊子は、2008年12月13日、成城学園に於いて開かれた「全面教育学研究会25周年記念集会 全面教育学の現在と未来」の記録集である。

1982年3月、全面教育学研究会と名乗って会を始めているので、正確には、26年で、都立大学大学院小沢有作ゼミ時代を前史として位置づけると、29年ということになる。そうすると2009年の今年、30周年記念の集まりも考えられる。わたしたちは、この1年を5年分の意味合いをもって過ごすことを決意し、そのスタート地点としてこの記録集を編んだとも言える。

全面教育学とは、庄司和晃先生が打ち立てた教育学であるが、その柱に、「三段階連関理論」の論理学、宗教学、そして、コトワザ教育、俗信教育、柳田社会科、柳田国語科、さらには仮説実験授業の科学教育と、まさに曼陀羅宇宙のごとく無限の方向に炸裂するユニークな学問体系である。わたしたちは、その魅力に惹かれ、集まり、論じ合い、外に向けてもいくつかの提案も発信してきた。新たなスタート地点に立ちながら、再度、その意味を確認しあいたいと考えたのである。

そして、以下のような「呼びかけ」を作成した。

「(略) 現メンバーで話しあった結果、また、庄司先生のご快諾も得て、下記のような「記念集会」を開くことと相成りました。この25年間、実に多くの出会いがあり、情況との火花あり、研究の深化ありとわたしたちなりに努力はして参りましたが、庄司先生の全面教育学を世に知らしめ、継続させる原動力を果たしてきたかと言えば、はなはだ心許ない現状ではあります。そうした反省の上にて、あえて「今」わたしたちは決断いたしました。

今回のコンセプトは、

1. 庄司和晃創設の全面教育学の存在を内外に再発信する。
2. 会員個々のもつ「力」とその価値と意味を再確認する。
3. 次の世代の者へ、着実にバトンタッチすべく第3コーナーを上手に回る。
です。」

庄司和晃先生の全面教育学の魅力に取り憑かれて、気づいてみたら四半世紀が経っていたわけで、この辺りで中間総括も必要ではあったろう。幸いなことに、庄司先生の記念講演も圧倒する迫力で実現、自分たちで楽しくはじけよう企画した「ミニフォーラム」も時間が足りないくらいで、植垣氏のコトワザ模擬授業も個性溢れる子供相手に、丁々発止のやりとりで「瞬間共同体」としての植垣学級が創出できた。

この記録集は、この充実した一日の記録に留まらず、わたしたちに新たな気づきももたらしてくれるに違いない。そして、その作業のなかで、共に新しいスタート地点に立っていることを改めて確認したいと思うのである。

※なお、集会の参加者は、かつて研究会会員として活躍された方、庄司先生の本の読者の方、会員とのかかわりのある方々、そして家族、友人とさまざまな関係の方たち56人であった。

また、事前の準備にあたっては、成城小学校の武田恭宗先生とご家族、学園の方々、そして当日の受付、会計、会場準備等は第二全面教育学研究会ともいべき「さぶらふの会」の若い先生方にご尽力いただいた。この場を借りてお礼申し上げます。

2009年3月8日

小田 富英

わたしたちは何を語り 何を発信してきたか

——全面教育学研究会の25年～と前史4年——



小田 富英

全面教育学研究会の前史は4年間の庄司先生が講師をされていた都立大のゼミ時代に当たる。これに正式な研究会発足後の25年を加えると、今年には29周年になる。来年、30周年を迎えるので、これをやりたい。

(冒頭部分の録音を逸したので、その概要を記した。——編者)

I. 今集会の意味——三つ

今集会の意味ということで、3点挙げておきました。

(1) 歩みを反省しつつ次の世代に伝えたい

わたしたちが庄司先生に出会った頃、先生は教育学者のなかでかなりユニークな立場におられたと思います。教育学者はたくさんいますが、庄司先生は文部省お抱えの学者でもないし、革新団体のお抱えの学者でもなし、民間の小学校の教員からコツコツ努力されて、自分の学問を打ち立てられ大学の先生になられた方です。たしか、理科教員の研究集会であったと思います。参加者から「最近の子供は変わってきた。ニワトリの絵を4本足で描く子が多くなってきた」という報告があり、「それは体験不足ではないのか」という声があちこちから聞こえてきたとき、庄司先生はそういう発想からではなくて、4本足のニワトリを描いている子供がいたら、「おもしろい」というところからスタートできないのかと話されたんです。そういうふうを考える先生がいることに驚きました。当時、わたしは柳田國男の研究もしていたのですが、庄司先生の柳田研究や教育研究に憧れながら門を叩いたのです。

具体的には、都立大学の夜間ゼミ（小沢有作ゼミ）に庄司先生の講義がありまして、今日の集会に参加されている小林千枝子さん（作新学院大学）。三石さん（東京学芸大学）、三石さんには今集会のチラシを大学で配ってもらいました。それから金沢にお住まいの方、そして植垣さんとわたしと5人で始めたのが全面教育学研究会でした。たった5人で始めた研究会がこんなに長く続きこんなに大勢の方が集まれるような会になるとは、はじめは思っていませんでした。しかしふりかえってみると、わたしたちの力不足で、次の世代に庄司先生の学問を伝えて来なかった。さっき司会の向井さんは「検証」という言葉を使いましたが、これまでの歩みを反省しながら、次の世代の人たちに伝えていけるような集会にしたいと思いました。これが今集会の第一番目の意味です。

（2）現在の課題をつかむヒントに——表層雪崩に抗す

もう一つは、レジュメのほうに生意気に「表層雪崩に抗す」と書きました。今みなさんはどうお感じかわかりませんが、今の世の中どこで暮らしても何を見ても、なにか表面的なうすっぺらな感じがして仕方ありません。わたしはそんな世の中だからこそ、人間が生きていくうえで、あるいは教育の仕事で今大事なのは、わたしたちの無意識、深層、精神世界を含めて考えることではないかなと思っているんです。庄司先生の全面教育学は、もちろんこの点を重視されているのですが、ほかの教育学から隔てているのは先生の発想・考え方です。わたしたちは先生の発想・考え方に大きな魅力を感じてきました。

先生が1979年に全面教育学を旗揚げされた頃の著書のなかに、こういう文章があります。

「わたしどもがこの世を生き抜いていくためには、自発・自主・創造の「徳」は重要である。と共にしきたり・習俗・慣例ということもまた必要である。教える教育もいいが、ある条件内では教えないことの方がかえって教育的でさえある。考える教育の強調ばかりでは考えることのありがたみもよくわからぬ。時と場合によっては下手な考え休むにしかずで、考えさせないことの方がよいこともある。発想力をつけるときなどはとくにそうだ。ある意味で、考える教育よりも考えない教育の方がえらくむずかしい。頭の中にはたくさんの妄想がうずまくからである。今の教員は、昔の師匠の半分ほどの見識と眼力とをきたえる必要があるの

ではないか。

ことほどさように、長短と限界を知つての統一的観点で運びたいものだ。伝統的教育法に学ぶべきことは存外に多いのである。長年月をかけての世渡りの知恵がそれとなくかくれひそんでいるからである。》(大東文化大学文学部教育学科 NO.14 研究室『全面教育学要説 第一分冊』32頁 1979)

先生は、「伝統的教育法」の価値への再評価を促しておられますが、ここには庄司先生の魅力的な考え方があります。「自発・自主・創造の『徳』は重要である。と共にしきたり・習俗・慣例ということもまた必要である」とか、「教えないことの方がかえって教育的でさえある」とか、また「考える教育の強調ばかりでは考えることのありがたみもよくわからぬ」などです。一言で言えば、相手を対にして統一的に理解するという方法です。もっと言っちゃえば、弁証法です。わたしの文脈でいえば、今の世の中を特徴づける意識ばかり表層ばかり、そしてモノばかりの風潮が蔓延している状況つまり「表層雪崩」に対して、無意識・深層・精神の世界をとりあげ、両方を統一的に把握するといういきかたです。

わたしたちは、これまで、この方法のもとで構想された先生の全面教育学、その展開である数々の教育実験に取り組んできました。たとえば、コトワザ・俗信・死の教育などです。これらの教育実験の一端は、今日の集会で知ることができると思いますが、わたしたちの話にも庄司先生的な、弁証法的な発想・考え方を必ず見つけ出すことができるはずです。

またこの発想・考え方は、今の世の中を見るモノサシとしても有効だと考えています。教育の問題だけでなく、現在どんな問題があり何が課題なのかを掴み取るためのヒントとしても受けとめていただいたら、こんなに嬉しいことはありません。

(3) 未来へのバトンタッチ——魅力的な発想・考え方を楽しむ

三つ目。わたしたちは、いわゆる団塊の世代です。この世代はまた「断絶の世代」でもあると思います。基本的な性格として、下の世代に繋げることが苦手な人間ばかりです。そういう人間が庄司先生の下に、梁山泊のように集まり、わいわい勉強してきました。しかし、ほんとうに庄司先生には申し訳ないのですが、次の世代に繋げるために若い人たちを育ててこなかった。大学にもっと我々で作る講座でもあれば、そこで学ぶ大学生を一人二人と育てることができたかもしれません。それはともかく、この際もつと気軽に、

つとぎつくばらんに、庄司先生の魅力的な学問を伝える場を持ちたいなあ
思い、今回実現の運びになったわけです。伝えたいだけでは駄目です。こ
までみんな、そう思うことだけは思ってきましたから。重要なのは、具体
な場、具体的な機会を設けることです。

そこで、今回極力若い人たちに呼びかけたのです。庄司先生がいらした大
文化大学では、庄司先生のお仲間の先生が授業中に学生たちに声をかけて
くださったそうです。学芸大学の三石先生のもとにチラシをおくりましたし、
成学園にも送りました。あと日本女子大にわたしの友人がいて、講義のな
でこの集会のことを紹介してくれました。そういうキッカケで参加された
はいますか。……いませんね。もうちょっと事前のアピールをすれば
かったなあと反省しています。

具体的な場、具体的な機会を設ける必要があるということで、とくに今回
ミニフォーラムを設け、全面研のこれまでのメンバーに呼びかけ集まって
らっています。後ろに今回の集会の準備を手伝ってくれた若い人たちもい
るので、庄司先生の魅力や学問の魅力を存分に語ってもらい、とことん弾
て欲しいと思っています。とにかく発想や考え方のおもしろさを楽しんで
ください。司会の尾崎さん、よろしくお願いします。

1. 全面教育学研究会の歩み

簡単にですが、全面研の歩みを三期に分けてお話しておきたいと思います。

1) 第1期・〈外〉への発信期——刺激的な出会いをかさねて

第1期は、わたしたちが始めた頃で、人間関係がズーンと広がっていった
期です。1期2期3期という区別はとくに深い意味はありません。1期の
事務局をやったのがわたしで、2期が日下さん、3期が道岡さんと、要する
事務局担当者で分けただけの話ですが、奇妙に活動の中身も少しずつ違い、
数を認めることができます。

この時期の特徴は、〈外〉への発信期で、5人で始めた会も3年ほど経つ
名簿を整理したときには60人、この時期に「全面教育学通信」を送り始
めたのですが、もう一寸経ってからの発送数は90人でした。こうしてどん
どん外に広がっていったんですが、これは偶然としか言いようがありません。
たとえば当時、太郎二郎社の雑誌『ひと』で若い先生たちに授業プランを
えさせる会の募集があったので、わたしも出かけてみました。太郎二郎社

の古い建物二階の狭い部屋に、20人くらい集まったんです。そこで自分はどうな授業をしたいのか、それぞれのプランを発表しあう機会がありました。わたしは柳田國男の社会科をやりたいと話したんですが、来ていた人たちの反応は冷たいもので、「いま柳田國男なんかやるのは古臭い、右翼じゃないか」とか、革新的な教師の「そんなことやるよりももっと科学的なことを教えたい」という意見で一蹴されてしまいました。浅川という社長さんは理解を示してくれ、二次会の飲み会に行かないかと誘われたんですが、わたしはちょっと気分が悪かったので帰りました。水道橋駅近くをとぼとぼ歩いていたら、後ろから「小田さん、小田さん」と声を掛けてくれたのが徳永さんです。水道橋の赤ちょうちんに入り、二人でいっぱいやりながら、「柳田は面白いよね」という話をしたのです。徳永さんが全面研に参加したら、そこに小林さんがいたのです。小林さんと徳永さんは、実は学生時代「ルソー研究会」で一緒だったそうです。

それから向井さんとの出会い。向井さんは、当時からガリ版のことば遊びの実践記録をズーッと庄司先生に送っていました。ある日の研究会の席上、庄司先生が「みなさん、こんな面白いひとがいます」といってその冊子を見せてくれたんです。わたしはそれを見て著者が大学時代から憧れていた向井さんであったことを知ったのです。さっそく全面研に来てもらいました。こうして会員一人ひとりに面白い出会いがあるんですが、ここではもうひとつかた、漫画家の吉田ゆたかさんとの出会いを紹介します。

吉田さんは、4コマ漫画によるコトワザ漫画を子供向けに初めて本にした方です。当時、自分の原稿をいくつかの児童図書の出版社に持ち込んでいたのですが、ほとんどから断られてしまったそうです。しかし、唯一あかね書房の編集長が評価してくれてついに出版できることになりました。そしてこれが当たりました。初版がすぐに売り切れ何刷りも爆発的に売れているときに、全面研に来てくれたのです。この間の事情は今日お渡しした『全面教育学 VOL.1』(1988)で吉田さん自身が「ことわざ事典の反響」を書いていますので、当時の状況をうかがうことができます。現在では、子供向けにたくさん種類の「コトワザ本」がでていますが、これを読むと、吉田さんの仕事の先駆性がよくおわかりになると思います。あとで是非ごらんになってください。吉田ゆたかさんの『まんがで学習 ことわざ事典』全5巻(あかね書房)は現在でも出ています。しかし吉田さんはこの全五巻が完結した頃に病気がわかって入院しそのまま還らぬ人になってしまいました。吉田ゆたかさんとの出会いは、とても刺戟的で得るものも大きかったので、たいへん残

念な思いです。

この第1期には、カメラマンの方が参加したり、新聞記者の長谷川孝さんがいたり、あとイラスト画家がいたり、教員だけではない面白い刺激的な時期でした。そこで雑誌を出そうということになり、風濤社という出版社から社長さんがきてくられて、庄司先生の考え方を軸にして教育雑誌を作ろうということになりました。何回か編集会議をもったのですが、まあ財政的なことや方針の違いなどが原因で、その雑誌は陽の目を見ませんでした。でも、わたしたちはここで話し合ったことを無駄にしたくないので、本を作らましようということが出来たのが、さっき紹介した『全面教育学 VOL.1』という本です。在庫がありましたので、今回プレゼントさせていただきました。当時の時代状況とわたしたちの問題意識がわかる一冊だと思います。

(2) 第2期・〈内〉の醸成期——多彩な教育実験群の提出

わたしは、柳田國男研究会の仕事が忙しくなったので、日下さんに事務局をバトンタッチしました。この時期の特徴は教室での実践、わたしたちは教育実験と呼んでいるんですが、主に教育実験のレポートを発表し合うなかで交流した時期でした。

ここで出会ったひとりが、若林和美さんです。若林さんはアメリカで「デス・エデュケーション」を勉強されてきた方です。現在も山梨の大学でこの方面の研究をされています。この方に研究会に来てもらって、アメリカにおける「デス・エデュケーション」と、柳田國男の「人の一生」やわれわれの死の教育との比較を試みました。その違いと共通性ですね。結局は、ほぼ同じことをやっていることがわかり、柳田國男のほうが早く「死の教育」の意義に気づいていたことを知りました。「死の教育」の実験は、日下さんが精力的に取り組んできたという時期でした。他にも、多彩なコトワザ教育実験、ことば遊び、人間一生論、柳田社会科・国語科、迷信（俗信）などたくさんさんのレポートが出され、われわれの認識が深まった時期だといえます。

(3) 第3期・庄司理論の継承期——ようやくのみ込めて来た

事務局が日下さんから道岡さんにバトンタッチ。これが第3期で、現在に当たります。研究会をなかなか外で開けないので、再度庄司先生のご自宅にお邪魔して勉強会をやろうということで2ヶ月に1回程度開いています。今年は、全面研のメンバーがほかに立ち上げた世相史研究会（封筒のなかにチラシが入っています）との合同の研究会をやりました。

さっきは、わたしは「反省」という言葉を使ってわたしたちの歩みをふりかえりましたが、正直なところ20年30年前に庄司先生の著作を読んでもわからなかったこと少なくありませんでした。ですが、わたしにしても今になってようやくわかってきたという状況があります。今頃気づいても遅いのですが、これから外に向って広げていきながら、若い人に繋げて行こうという流れが自覚されてきたのが第3期の現在、第3期の特徴だと思います。今日の集会は、こういうわたしたちの意思の表れです。庄司先生にもご承諾いただいて、今日は久しぶりに1時間ほど、みんなで先生の講義を聞く機会をもつことができます。

Ⅲ. わたしたちの課題——全面教育学の継承と発展

さて、わたしたちの課題です。それを端的に言えば、全面教育学を継承し発展させていくことです。もう少し具体的に言うと、全面教育学の背骨理論である「認識の三段階連関理論」をすべての場で使ってみようということです。これは今日の集会での呼びかけでもあります。

(1) 授業や生活で活かす

三段階連関理論は、授業作りの場で必ず役に立つ考え方です。とくにこの理論でいうノボリ・オリのための「キッカケことば」を頭のなかに入れておくと、子供たちとの会話も弾むんじゃないかと思います。今日の集会にはわたしの若い仲間にも来てもらっていますが、勤務校だった武蔵野第二小学校での話を紹介します。

ここでは数年前まで子供のコミュニケーション能力を育てようという校内研究をやり外部へ発表会もしました。わたしは研究主任だったんですが、表面をなぞるような研究ではおもしろくないので、子供たちのコミュニケーション能力を高めるために、庄司先生の「三段階連関理論」をお借りして身近な言葉で自分たちの理論を作りたいと思いました。子供たちの会話を聞いていますと、すぐに「ださい」とか「むかつく」とか感覚的な言葉がたくさん飛び交っていることに気づかれるでしょう。これらを「キッカケことば」によって第二段階(表象レベル)に持ち上げられないか。さらにはもっと高次の第三段階(概念レベル)に持ち上げられないかと考えたんです。それで、「どうして」「べつの言葉で言えば」「他と比べたら」とか、「思っていることにぴったりした言葉は」とか「コトワザで言えば」とか、子供たちをノボ

リ・オリさせるためにのキッカケ言葉を研究しながら、「感じ言葉—思い言葉—考え言葉」の三段階を考案したのです。子供たちの1年生から6年生になるまでに、この三段階をスパイラルのように繰り返しながら、何か感想を求められたら自分の言葉で長く理路整然と話せる子供たちを作ろうと思ったのです。

これを「三段階連関スパイラル理論」と呼んでみようと思いついたのですが、庄司先生の本を読み直してみたら、「三段階連関理論は螺旋的に発展する」と書いてありました。庄司先生はとっくに分かっていたんだなあと思いました。また戦後、柳田國男に「思い言葉」というエッセーがありまして、戦前の教育は漢字に重きをおきすぎた結果、自分の思いにぴったりの言葉を使うことができなくなってしまったのだと、こういう話が新聞に載ったことがあります。小学生時代は「思い言葉」が豊かになる時期だということです。わたしたちは、これを育てる手立てを研究したわけです。三段階連関理論を頭に入れておくと、授業でも生活でもたいへん役に立ちます。

(2) 世界認識に活かす

全面教育学を継承し発展させていくためにのもう一つの提案は、これを「世界認識に活かしましょう」という提案です。この世の中・時代を分析するひとつの手法あるいは自分で考える武器にできないかと考えています。これをみなさんと一緒にできないかと思っているのです。

(3) 多彩な教育実験の展開

三つ目の提案は、さきほど挙げた教育実験群——多彩なコトワザ教育実験、ことば遊び、人間一生論、柳田社会科・国語科、迷信（俗信）などの分野をこれからもどんどん積み重ね、その意義を検証していくことです。とくに、今日の篠原さんや長谷川さんから話が出るかもしれませんが、現在の学校ではなかなか語れない宗教教育の話題です。これについても実験しながら深めていくことが課題だと思います。

「今集会の意味」でも触れましたが、以上の三つの課題に加えて、今日の集会を、次の世代へのバトンタッチの〈場〉として位置づけていきたい。これからもこういう機会を増やしていきたい。そして若い人たちにも積極的にアピールしていきたいと考えています。

さて、柳田國男に「次の代の人々と共に」という講演記録があります。昭

和32年の10月31日に、国学院大学日本文化研究所に集まってきた大学生に話しかけたものです。柳田が亡くなる5年前のことです。この講演の最後の一節は、わたしたちの気持ちにピッタリしていると思われまので、基調報告の最後に紹介します。

「わたしはここに来て若い学生たちを始終見ておりますのは、この人々といつまでも議論ができるように永く生きておって、国のもう少し良くなるのを見たいからであります。」

柳田が若い人たちに注目するのは、共に議論し、世の中がもう少しよくなるのを共に見たいからだと述べています。

今日の庄司先生の講演「全面教育学の現在と未来——次の世代の人たちへ」は、わたしたちの方で設定したテーマです。わたしは、庄司先生にも柳田と同じような気持ちで若い人たちに呼びかけてもらいたいと思いきょう副題をつけましたが、正しくは柳田の講演と同じ「次の代の人々と共に」とつけるべきでした。わたしの記憶違いによるミスです。でも庄司先生は、きっと「若い人たち共に」という呼びかけをしてくださると思っています。では、みなさんで庄司先生の講演をお聞きしたいと思います。(終 拍手)

(2008/12/13 於 成城大学)

.....

編者註

- 全面研の初期におけるさまざまな出会いについては、これまで小田さんから度々伺ってきたが、研究会の変遷を3期に分ち、それなりの特徴を描いて公開されたのは、おそらく今回が初出ではないかと思われる。
- これから全面教育学を次の世代と共に議論し、どう継承・発展させて行くか。この報告を無視して進めることはできないだろう。今どういう方向に進んでいけばいいかははっきり描かれているからである。
- その一つの試みとして、小田さんと若い同僚たちの会がある。いつか、その活動が詳しく紹介される日を待ちたい。
- 小田さんには、残念ながら原稿をチェックしていただけていない。したがって、ここに不都合・不適当な箇所があったら、すべて編者の責任である。

(尾崎)

水三回 矢野龍渓の『浮城物語』を、王様お
(三) 新編浮城物語(新編浮城物語) 矢野龍渓著
上巻、下巻、川柳
藤野野矢野龍渓著、藤野野矢野龍渓著、藤野野矢野龍渓著、藤野野矢野龍渓著、藤野野矢野龍渓著

水四回 矢野龍渓の『浮城物語』の構成
上巻、下巻、川柳
大田原(今川)時代の歴史を扱って、
村松金太郎の活躍の中心として描かれてきた。

水五回 浮城物語の「上巻」の構成
上巻(今川)時代の歴史を扱って、
村松金太郎の活躍の中心として描かれてきた。

水六回 浮城物語の「下巻」の構成
下巻(今川)時代の歴史を扱って、
村松金太郎の活躍の中心として描かれてきた。

水七回 浮城物語の「終巻」の構成
終巻(今川)時代の歴史を扱って、
村松金太郎の活躍の中心として描かれてきた。

水八回 浮城物語の「終巻」の構成
終巻(今川)時代の歴史を扱って、
村松金太郎の活躍の中心として描かれてきた。

水九回 浮城物語の「終巻」の構成
終巻(今川)時代の歴史を扱って、
村松金太郎の活躍の中心として描かれてきた。

水十回 浮城物語の「終巻」の構成
終巻(今川)時代の歴史を扱って、
村松金太郎の活躍の中心として描かれてきた。

水十一回 浮城物語の「終巻」の構成
終巻(今川)時代の歴史を扱って、
村松金太郎の活躍の中心として描かれてきた。

「福」の意を教えるの批評の文により、浮城物語の
組の組織からの解法も根拠として示してはた
る。

『浮城物語』の「終巻」の構成の中心は、
村松金太郎の活躍の中心として描かれてきた。

『浮城物語』の「終巻」の構成の中心は、
村松金太郎の活躍の中心として描かれてきた。

『浮城物語』の「終巻」の構成の中心は、
村松金太郎の活躍の中心として描かれてきた。

『浮城物語』の「終巻」の構成の中心は、
村松金太郎の活躍の中心として描かれてきた。

『浮城物語』の「終巻」の構成の中心は、
村松金太郎の活躍の中心として描かれてきた。

『浮城物語』の「終巻」の構成の中心は、
村松金太郎の活躍の中心として描かれてきた。

『浮城物語』の「終巻」の構成の中心は、
村松金太郎の活躍の中心として描かれてきた。

『浮城物語』の「終巻」の構成の中心は、
村松金太郎の活躍の中心として描かれてきた。

『浮城物語』の「終巻」の構成の中心は、
村松金太郎の活躍の中心として描かれてきた。

です。また情報交換の場としてご利用し
下され。

各組にのぞいてください。
(申し込みの枚数は、通信に適合
するものをさせていただきます。)

入会費の有様

希望者は、右記の封書に、六の貼印を
十枚を同封の上、送付して下さい。
その際、住所、氏名、職業、電話番号を
記入下さい。

送り先
小倉市中緑町五-三十一-十九、103
川田 信夫
(依頼の書類をその宛先まで)

例) 川田信夫様へ
住所: 小倉市中緑町五-三十一-十九、103
(神奈川県)

新刊本「浮城物語」の全巻を、この通信に
添付して、(余額を返す。お返しは...)

全十回のうえ、お返し
水三回「浮城物語」の全巻を、この通信に
水四回「浮城物語」の全巻を、この通信に
水五回「浮城物語」の全巻を、この通信に
水六回「浮城物語」の全巻を、この通信に
水七回「浮城物語」の全巻を、この通信に
水八回「浮城物語」の全巻を、この通信に
水九回「浮城物語」の全巻を、この通信に
水十回「浮城物語」の全巻を、この通信に
水十一回「浮城物語」の全巻を、この通信に
水十二回「浮城物語」の全巻を、この通信に

300円

川田 信夫
川田 信夫
川田 信夫

川田 信夫
川田 信夫
川田 信夫

川田 信夫
川田 信夫
川田 信夫

川田 信夫
川田 信夫
川田 信夫

川田 信夫
川田 信夫
川田 信夫

川田 信夫
川田 信夫
川田 信夫

川田 信夫
川田 信夫
川田 信夫

川田 信夫
川田 信夫
川田 信夫

川田 信夫
川田 信夫
川田 信夫

川田 信夫
川田 信夫
川田 信夫

全面教育学の現在と未来

——次の世代の人たちへ——

庄司 和晃



庄司和晃と申します。今日はようこそおいでくださいました。これから全面教育学とは何かということのポイントをお話して、それから全面教育学成立までのプロセスあるいは源流といった話をしながら、いただいた御題に近づいていきたいと思ひます。

I. 全面教育学とは何か

(1) 教育の一面性を自覚する —— カラクリを握りとる

全面教育学とは何か。まず一つは一面的な教育を克服したいということがあります。どういうことか。教育学の主張を見ていきますと、だいたいが一方的です。一方的ですからいつも裏を見つけていく必要がある。なにか先走った主張を聞いたら、裏やその周辺はどうなっているのかを考えていく必要があります。たとえば、今の教育と昔の教育とを例に挙げます。昔の教育というと、たいてい否定されたり押し込まれ流されたりしますね。だが、そういう嫌がられたりするところに教育の力を発揮する種がこぼれているんじゃないか、と考え掬い取る必要があります。平和教育ということが熱心に主張されると、その反対の悪者は、軍国教育とか天皇さん中心の皇国教育ということになり、これは否定されます。これはおかしいと思うわけです。あの当時はあの当方で一生懸命やっていたのだから、そのなかのプラスマイナス

を考え、一度そのカラクリを握ってみる必要があります。いったい軍国主義教育とは何であったのか。皇国主義教育とは何であったのか。いくさに負けた後の民主主義教育とどう違うのか。イデオロギーの違いですね。そこから辺りからカラクリをいじってみる必要があります。その違いはと言えば、戦後はだいたい生命尊重の教育だと言われます。だが生命尊重ばかりではなく、われわれは生命を虐待し相当悪いこともしています。こういう方面の教育というものがあるし、生きていく教育は喜びだけでも死ぬというのは怖い、だから死の教育も見つめる必要があるんじゃないか。そういう発想をしていきたい、こう思うわけです。大教育学者などによれば、仏教・神道・道教における教育法というのはだいたい「教化(きょうか)」ですね。「教え化かす」方法です。「教化(きょうけ)」とも言います。これは非常に意識的に短期間に人間を質的に変革してしまうというニュアンスがあります。たとえば日蓮さんのほうの修業である「水かぶり」を一月なりがんばってやりますね。また神道や仏教でも千日行などという修業もあって、一気に人間変革をやってしまいます。こういう教育法も一方にはあるんですね。教化教育です。「教化(きょうか)」というと緩やかに時間をかけて、その中に入っているといつの間にか染まっていく。たいていの教育学者はそういうものを教育とは考えない。教育ではないと言い切っています。ぼくは、いや、そうじゃねーんじゃないか。これも教育の一つとして抱かかえていった方がいいんです。善い悪いの選択は後回しにして、こういう教育もある、という考え方をしたいと思うわけでありまして。これが全面教育学とは何かを考える際の第一番目のポイントです。

(2) 全面性・全体性を回復する —— 教育の種をひろう

二番目のポイントは全面性ということです。全面性の回復ということです。たとえば科学教育というものが一生懸命叫ばれるとしたら、科学以前の教育はなんであるのか。それ又以前の教育はどうであるのか。科学—前科学—非科学の三つを押さえないと、一つのテーマでも全体性を帯びてこない。だから科学的思考の教育ばかり考えないで、それ以前の比喩・たとえ・コトワザ、そういう段階の思考教育も充実される必要があります。それを科学教育と結びつけて教える。「夕焼けは晴れ 朝焼けは雨」というコトワザは気象学と結びついています。またそれ以前の非科学の面は嫌われていますね。新聞なんかに出てくる科学者によるとこういうのは嘘っぱちということになり

ますが、神秘的な世界、非科学の世界がどのぐらい広い領域をもっているか。そのあたりにも教育の種を拾う必要があります。

ぼくは戦争時代の最後の兵隊さんでした。そして見てきました。柳田さんも言っていましたが、徴兵検査があって軍隊に入っていくと、だいたい兵隊さんは世の中を見てくるんですな。ぼくも最後の特攻隊で一年軍隊にいましたけれども、そこで良かったことは世の中を見たことです。世の中を見たというのは、人のうらおもてを見て来たということです。どのくらいかっぱらいをやったか。どのくらい嘘ついたか。嘘は上手につかないといけない。こういうことを学んできましたね。それも教育の一つとして考える必要がある。そこに「裏街道教育」というテーマが浮かび上がってくるわけです。とにかく要領よく生きるなど、一生懸命やる以外にいかに弁証法的な側面をもっているか。軍隊での経験は、教育というよりは「救い」という面を持っているわけです。全面性・全体性というのは、うらおもて・周辺文化というものと一緒に見ないと、ひとつだけ強調してあぐらをかくということになりかねません。

(3) 教育の本質は渡世法体得にあり —— 世渡りは戦略だ

三番目のポイントは、教育の本質は何かという問いであります。答は世渡りを身につけるということです。この世を渡る。すごく良いイメージです。この世を渡っていくんだ、こういうことです。ぼくなど脳梗塞を三回ほどやりましたから、軽く済んだために、一回来るたびに、またお迎えがいらしたかと思いました。それでもぶっ倒れますから近くのモノにしがみついてがんばりました。「大丈夫だ、大丈夫だ」と自分に言い聞かせながら5分間ぐらいがまんすると、この辺(頭部)がピッピッとまた血液が流れてくれるんです。助かりました。まだお迎えは早いもの一、といったところです。こういう神秘的な力というものも考えておきたい、そう思っているわけです。

教育の本質は世渡りの仕方を身につけるということです。これを教育学的にかためると、「この世を渡るべく生き方を学び取り身につけそれを行使することである」。こうなります。世渡りをこういうふうに考えていきたい。世渡りを考えてみると、第一のご利益は楽しくなければならぬ。ぼく、みなさん方を見ていて、あの人はあんなに楽しく世渡りをしているわいと思うことがあります。子供でもそうです。砂場での遊びなどみていると、あの子はどうやって一人ぼっちにされたのか、仲間に入っているのかい、などと心

配します。でも子供もすごい世渡りをしている。砂場で遊んでいてですね、一人がさみしく除け者にされて立っていたんですな。そしたら親分格の子供が出来上がった砂の作り物をワーツと壊してですね、「〇〇ちゃん、入れ！」とこう言ったんです。そしたら一人ぼっちでいた子はスーッと仲間に入っていつちゃったんですよ。この子はこういう世渡りをしているのかと感心したものです。人間研究・児童研究は世渡りの研究をしてみたらどうですか。こういうことになります。

世渡りといえば、虫・草木もそうです。ミミズはこの陽の当たるときに乾いた地面の上をなんで移動してきたんだろうとすることがあります。水が欲しいんだろうかねえ。生態学だの生活学などは止めて、あれは世渡りをしているんだ、なんとか生きて行こうとしているんだと見てみる。これは戦争中に使ったストラテジー、いわゆる戦略ということですか。ああいう戦略をもって現実の困難を突破しようとしているのか。こういうふう考えることができます。教育の本質は、渡世法の体得なのです。

(4) ばっかり主義を克服する——ミミズの身になって考える

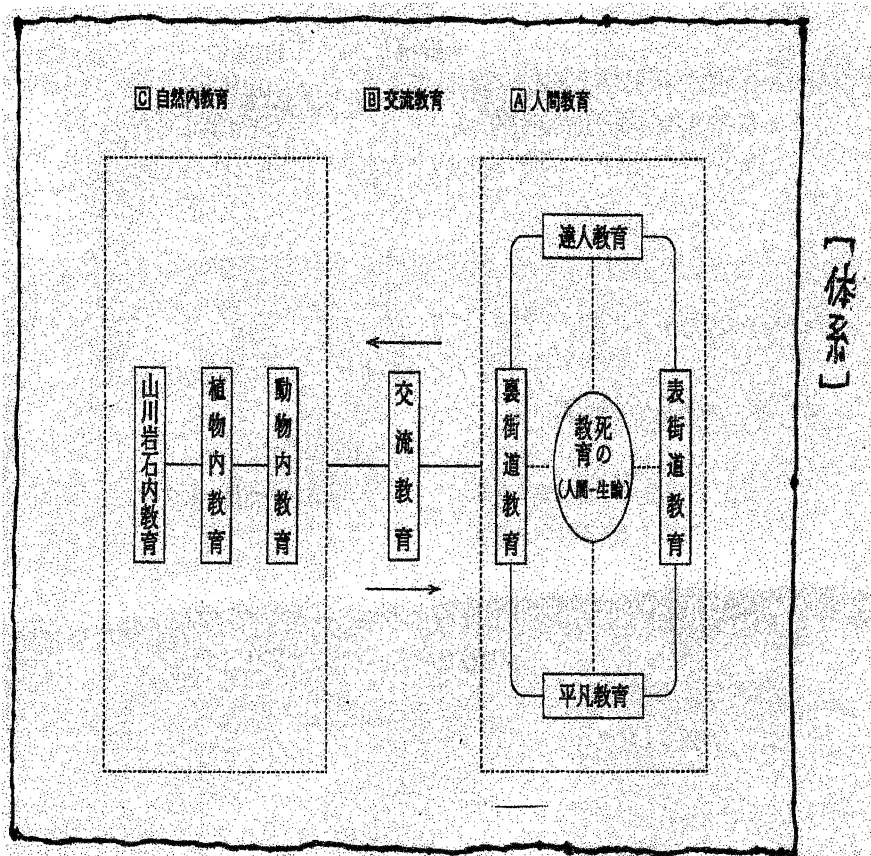
ポイントの四つ目。虫の世渡り、草木の世渡りについて。この草はなんでいつも出てくるんだろう。根の強さでもって生きているのか。こういうふうに考えてきますと、次は「ばっかり主義」を克服しようという課題が浮上してきます。人間ばっかり主義。これは仕方ないです、人間だからね。それから科学ばっかり主義。ばっかり主義はその反対の価値を棄てていきます。だから棄ててしまうというもったいなさを掬い取っていきたい。

ぼくの友だちでもあった生態学者の延原肇（のぶはら はじめ）さんという方が、千葉のほうにおりました。もう亡くなりましたが、生態学で、海岸植物の生き方の研究をやって博士号までとりました。延原さんのものの見方考え方というのは、ミミズの身になってミミズを考えるというものです。ミミズの研究をしながらミミズに怒られるのが怖い。まわりの学者から批判されようがミミズが喜んでくれるのを研究の励みとした人です。だから、シャーレの中になにか生きものを入れて、電気をかけたり光をビガッと当てたりしてその動きを見るというような、あんないじめるような研究は、本当の生態を明らかにすることにならない。これなどは科学ばっかり主義を克服したいきかた、成果だなどと思います。

(5) 死の教育を人間教育の中心に据える——世渡りが楽しくなる

チラシ (レジュメ) の方、「体系」の枠組を見てください。

「死の教育」というところがあります。これが全面教育学とは何かについて五つめのポイントです。死の教育を反対からみれば「人間一生論」になります。この意味 (内包) はですね、死を意識するという点にあります。死を意識させたい。そのご利益は世渡りが楽しくなること。外延は死の文化。葬式や法事から、年中行事から、人の一生から、死の文化というのは非常に豊かに存しています。ここから掘り取っていきたい。死の教育をこう設計し、人間教育の中心に据えているんです。



死を意識する。死は非常に不思議なことです。死の教育は全面教育学のなかではよく研究されたものの一つです。とくにさつき名前が出ました日下さんの教育実験ですな。「死の教育の試み」や「死の授業」。それから徳永さんの「小学生の君たちは死をどのように知るのか」や「中学校における『死の教育』の試み」。あとで機会がありましたら話してください。ぼくはだいたいこの所まで築き上げたなという感じを持ちました。

日下さんの教育実験は、死についての際どい側面をつまみあと1ヵ月の命だと宣告された場合に本人に知らせるかどうか、という深刻な問題。それから、蜘蛛の巣に蝶がひっかかっているがみんなはどうするか。また「一寸先は闇」というときの闇はどういうイメージかなどを探求しています。また徳永さんの教育実験は、自分の一生を、生まれてから死ぬまでを年表式につくってみるといふ試みです。そういうふうにして死の教育ではどういふ話題を提供するか、自分の一生を年表にするとどういふ作業をさせるか。今後の仕事として残すべき財産だと思っています。

(6) 俗信文化／「魂通り」を見直す——自分の精神をなだめる

さて、みなさんは今ぼくの話聞いていますね。これはいわば「表通り」だと思うんです。表通り。そして話が終わってしまい休憩時間になったりすると、これは「本音（裏）通り」。つまり表通りと裏通りという相があります。その下の段階にぼくは「魂通り」があるというふうには考えていますね。これが六つ目のポイントです。魂通りには、たとえばトイレに行くのが怖いとか、一人ぼっちになったときに恐怖を覚えるとか、死に直結するような世界があるんですな。そこに力を注いで子供たちに教えたり作らせたりしたいのは、「俗信」です。俗信というのは「普通の信仰」のことです。これは兆占禁呪と四つに分類されています。「兆（ちょう）」とは、予兆つまり知らせ。

「占（せん）」とは、占い、前もって知りたい。「禁（きん）」とは、やってはいけないタブー。最後の「呪（じゅ）」とは、まじない。とくにこの「まじない」が大きな役割を果すだろう、今後の教育学や看護学においては見直すべき文化であろうと思います。

「魂通り」教育の場面では、怖さを予防するなにか仕掛けの道具を持たせたり怖さを呼ぶ施設を改善したりすると同時に、怖いときに自分の精神をなだめる言葉などを意識していきたい。ぼくなど、脳梗塞になってブルブル震えてきたときに「大丈夫だ、大丈夫だ、大丈夫だ」と呼びかける。あるいは「南無観世音、南無観世音、南無観世音」と唱えてもいいし、「どうにかなる、どうにかなる、どうにかなる」と言ってもいい。こういう繰り返していく呪文を、子供たちに意識させ、また子供たちはこういう呪文をどう思っているか。どういふ反応するか。こんな教育実験を進めていきたい。兆占禁呪のとくに「呪い」（まじない）あたりは今後の遺産になるだろうと思います。

(7) 人間の有限性は 空想力で突破する——自分のための実践論

全面教育学の最後のポイントです。

教育学でも看護学でも「人間の無限の可能性」ということを言いますね。ぼくは、無限の可能性などはありません、という立場です。人間は有限です。限りがあるのです。なぜならば、人間は死ぬからです。どんな可能性があると思ったところで、死ぬときはコロッと逝ってしまいます。だから無限の可能性があるとと言われると、嬉しいけれどね——こんなこと、わざわざ持ち出さなくてもいいのです。群馬県の小学校に斉藤喜博さんという先生がいました。のちに教育学者になりました。この方の『教育学のすすめ』という本には、子供の無限の可能性を無限に伸ばすのが教育だ授業だ、という定義が書いてあります。いやあ、ぼくそれ読んだときには、斉藤喜博先生は尊敬しますけど、それは嘘だろうと、そんなバケモノみたいなことできるわけはありませんよ。(笑) そう思ったわけです。むしろ人間は有限なんです。自分の持ち物である内臓諸器官についてさえほとんど知らない。人間は有限なる存在なのです。

だけど話はこの先があります。人間の有限性は実践論で乗り越えることができるんだ、人間はそのためのすごい実践論を持っていますよ。こう言いたいのであります。一つは現実的に乗り越える。もう一つは、現実的には乗り越えられない面、死というものが降りかかってくるからね。乗り越えられないからこそ、世界はどうなっているのか。ただ原子・分子で構成されているということでおさまっているのかといえそうではなく、もっと何かがあるはずに違いないという人間の空想力・想像力・イメージ力が発揮されて、それが死の文化を形作っている。地獄や極楽(天国)の概念があり、あの世という把握もあり、物語がいっぱいありますね。大した文化遺産です。みなさんどうですか。ぼくなど、「お迎えが来る」などということが、実際存在しているのかと問われれば、「ある」と思ってるんです。「ある」と思った方が楽しいからです。ぼくも死んだら、祖父ちゃん祖母ちゃんのところに行けるだろう、こう思っています。「あの世」などという現実的には乗り越えられない世界については、人間は空想力で突破しているのです。これが人間の有限性を突破する実践論です。

以上、全面教育学とは何かの問いに答えるいくつかのポイントをお話しました。

Ⅱ. 全面教育学の源流



(1) 敗戦、一日で変わる世の中——乱世は人々がいきいきしていた

全面教育学に辿りつく前に何を作ってきたか、全面教育学の源流についてお話します。レジュメの方に「乱世」ということを書いておきましたが、いやあ、とにかく天皇さん中心の皇国時代というものは、ある意味でほんとうにピッタリとしたすごい教育をやって支配していたもんです。すごい強制力があつたし、みんなその気になつたし、ぼくもそうでした。しかし、ぼくなどが驚いたのは、昭和20年8月15日の正午に終戦詔書の放送を聞いたあの日をもってほんとうに世の中がひっくり返ったことですね。兵隊の位を例にすると、二等兵・一等兵・上等兵・兵長そしてずうっと昇って中将・大将・元帥・大元帥と、あれだけの階級組織へ人々を駆り立てていた世の中が一日にして崩れるんですな。

いやあ、すごく崩れるもんです。ものすごい山が崩れ落ちてきたような思いでした。当時、軍隊は溜まっていると何しでかすか分からないから、そこに置いておきませんね。内地だと、残った兵隊さんたちをサッサと故郷に帰すんですな。こういうこともあってぼくも帰りました。乱世ですね。まず食う心配があつたのですが、一面すごくみんなイキイキしていました。

ぼくはすぐに師範学校に編入しました。かなりたくさん兵隊帰りがおりましたね。そこでは、いやあ、こういう机はぶっこわして燃やして……、そして卒業していったものです。当時、現場の先生は少なかったので山形の師範学校からも卒業と同時にドッサリ東京神奈川千葉埼玉の学校にみな就職していきましたね。だから就職試験はなし。ぼくは師範学校を卒業した免許状も持たないで山形県の教員になりました。ぼくはその後上京し成城学園に就職したんですが、免許状をもたないと給料が少ないのでようやく手に入れました。昭和28年までぼくは免許状をもたなかった。

(2) カリキュラム作りに励む——單元名が次々と出てくる柳田國男

戦後すぐの小学校の現場ではどこも忙しく研究をしていたもんです。当時一生懸命やっていたのはカリキュラム作りです。どこの学校でも学校独自のものを出そうと努力していました。ところがそれはたいい上手いきませんな。それでもまとめたのは、全国でも何10校とあります。山形県の学校でも五つ六つ出ました。ぼくの学校でも取り組み、教育カリキュラムというのはああやって作り実践するののかという体験をしましたが、上手いかなかったですね。

そして成城学園に参りました。そしたらちょうど社会科作りに取り組んでいました。昭和24年です。そのときぼくは何をしようか、宗教教育をしようと考えていたこともあったんですが、校長さんが「なにウロウロしてるんだ。少し勉強してみろ」と言って連れて行ってくれたのが、柳田國男さんの家でした。昭和22年6月ころから成城の先生たちは柳田國男さんの民俗学研究所に通い毎日社会科作りに取り組んでいる。おまえも入れということで、昭和24年の9月に初めて柳田さんを見ました。民俗学などというの知らないし、お会いするのも初めてでしたから、もう見た瞬間は、ただ頭の大きい人だな—ということだけ驚いてしまって。(笑) 地方では、あんなに社会調査・児童調査をやりながら、それをタテヨコに配置し接点で単元を選ぶなどという研究をヒーヒー言いながらやっていたのに、こっちでは、柳田さんの口からヒョロヒョロと單元名が出てくるんですな。これには驚きました。

(3) 基礎学力を保障したうえでの教育実験——嘘をつくのも大切

そしてぼくが成城に来た昭和24年には、柳田さんの下でだいたいプランができていました。ぼくが参加する前は、およそ12校くらいの、社会科教育のプランを研究している花形学校というのがありまして、その成果を取り入れながら、だいたいの下準備は終わっていた頃です。このなかで第一番は東京の桜田小学校プランでした。社会科教育については素晴らしかったですね。ぼくも授業を見に行きました。行って見ると机が遠方形に並べられていたりして非常に華々しい社会科の授業でした。いや、すごいもんだと、室井ミツヨシ先生など、まだ名前覚えておりますもん。

成城学園の小学校では先生たちが外に授業参観にいくと一日ビッチリ見にくるということになっていました。もちろんお昼が過ぎるとサッサと帰る先生もいますし、残る先生もいます。ぼくも昼食後残りました。そして午後

また教室を参観にまわりました。そして驚いたのは、午前中の華々しい教育はすっかり影をひそめて一斉にドリルをやっていることでした。室井先生の教室では、黒板に分数の掛け算割り算が10題くらい並んでいて、それを子供に解かせているんですな。シーンとしていました。そこでぼくはナルホドと思ったんです。ハア、新教育の華々しい裏で基礎学力というものをこんなに徹底してやっているのだ。こう思いました。

それ以来、ぼくは自分がなにか教育実験をしたいと、つまり文部省に言われているとか、指導要領にあるとかではなくて、自分でなにかやってみたいと思ったときは、自分の担任している親たちに対して、一度は堂々と自分の考えを演説する、こういうことをやるんだと明示するようにしました。そして読み書きそろばんについては絶対に手を緩めない。それが表立っていれば親からの文句は出ようがない、そのくらいまでやっておいてから教育実験は取り組むべきものだと思っています。ひとつやってみてください。

これからも上からの締め付けはもっと大きくなるでしょう。あんまり締め付けが酷いようなら、嘘をつくことを憶えることです。「指導要領通りにやっているか」「教科書通りにやっているか」。こう問われたら「やっています」と言って、やらないことです。(笑) そして基礎学力の部分は逃さずしっかりやることです。毎日、計算なり練習のためのテストだけはやるのです。5~10題くらい毎日やってその日のうちに丸つけて返すのです。ぼくの教育実験はこういうことをやっておいて取り組んだのです。だから嘘をつくということはある面、重要なことなんです。

(4) 握り切れなかった柳田社会科の思想——亡くなって知るすごさ

さて、柳田さんのところで社会科の単元作りをやってきましたね。そして昭和26年に内容を発表しました。ガリ版刷りの専門家による分厚い冊子になりました。40くらいの単元を柳田さんが作りました。児童の発達という問題はどうか。柳田さんは、「児童語彙」すなわち子供だけに使われる言葉を集め分類し排列して、たとえば遊びの段階を表す「口遊び」「軒遊び」「外遊び」などの言葉によってその発達過程を握っておりますから、学年間の段落設定も適切でよかったです。

たとえば、第2学年ではより感覚的な面を大事にして、「遠さ近さ」という単元が設定されています。また「古さ新しさ」などは、柳田さんでないと出せない単元だと思います。「古い新しい」「遠い近い」ということをどうや

って小学2年生に教えていくか。また6年生になってきますとですね、「貿易」「世界の人々」「正義」「平和」という単元がありますが、なかでもすごいのは「人の一生」という単元が設定してあることです。これは継承できるんです。

当時ぼくは理科研究と社会科研究に関わっていたんですが、社会科の人たち5,6人と単元一つひとつについて柳田さんの講義を受けました。これがほんとによかった。だけど、ほとんどわかんなかった。(笑) わかったのは亡くなってからですね。だから今ではあの柳田さんの作った社会科の単元がすごい遺産と言えます。柳田さんはその後、実業の日本社から『日本の社会』という教科書を作るんです。これ小学校篇はできあがりましたね。ぼくなどが担当したのは、『指導の手引き』というやつです。単元ごとにどういう授業を展開するかということを書きました。で、出来上がりましたね。はじめの年は売れたんです。でも次の年から売れなくなってきましたね。教科書は競争が激しいということで、ついに昭和36年度で柳田社会科の教科書は消えました。

ぼくら成城学園の小学校では、そのあと柳田社会科を続けるかどうか討議しました。たしか昭和37年に柳田さんが亡くなります。享年88歳でした。そういうこともあるし、教科書も手に入らない。「あんたたち柳田社会科を背負っていけるか」と問われると、ぼくも「やーめた」という側に回って(笑)、いやあ、悪いことしちゃったと思っています。ほんと、当時は柳田社会科、柳田さんの学問、それから教育観・児童観、それから世渡り観というものについて、きちっと握っていなかったんですなあ。告別式が済んで、柳田國男という人はえらことをやっていたんだいと気づいて、教科書から何から柳田社会科の資料を集められるだけ、集めました。だから、ぼくらは拾い切れなかったんですよ。そして成城学園では学校図書の教科書に乗り換えちゃったんです。

(5) 柳田國男の児童観・教育観を継承する——例えば「人間一生論」

だけど、柳田社会科の単元「人の一生」については、ぼくは継承できるように「人間一生論」として理論化しました。柳田さんのそれは、生きている間、人には回りの世話にならなきゃいけない時代がある。赤ちゃん時代～年寄り時代は、病気あるいは妊娠で人の世話にならなきゃならない。こういうことを伝えるとともに、人の一生には節目があるんだということで少年時代、

〇〇時代として生きている人の姿を描いたものです。ぼくはこれに付け加えて、「コトワザの人間一生論」という形で、人の一生をコトワザではどう言い伝えてきたかを整頓しました。それから人の一生を科学の面からみると大脳の発達の問題があります。このように人間の一生については、科学—前科学—非科学という段階として捉えることができます。柳田さんの「人の一生」はだいたい非科学面を押さえています。お祝いなど儀式として行なわれますから。ついでコトワザ人間一生論という前科学。大脳研究などの科学的知見。ぼくの人間一生論は、以上の三者をまとめあげてあります。

ぼくが柳田國男さんに会ったというのは非常に大きかった。亡くなってから勉強し始めましたからね。柳田さんの児童観・教育観、教育観は世渡り観を学びました。児童観はといえば、子供は言葉を作り出す、子供は昔を残す、こういうものでした。それを継承して柳田國男の教育観・児童観を明らかにしてきました。

(6) 柳田国語科も見逃せない —— 「昔の国語教育」を教育実験に

さらに、柳田さんたちは社会科の教科書を作る前に、国語科の教科書を作っていたんですな。柳田さんは「昔の国語教育」を発見したんですよ。謎・諺・唱など、いっぱいあるんです。また「口上」という子供教育もありましたね。たとえばお母さんが、ぼたもちを作ったから〇〇さんの家にもって行きなさい、と子供に命じるんです。そのとき「これこれこういうわけでぼたもちを作りましたから、召し上がってください」というように口上を教えるんですね。そして子供に言わせてから出してやるんですね。子供は駄賃をもらったりして帰って来るんです。これは口上教育。ハア、そういう国語教育があるのか。これと似たようなのは軍隊での「復唱」義務がありました。人に何かを伝えるというのは、そのくらいの折り目をつけなくてはならない。昔の国語教育の一端です。

柳田さんは昔の国語教育を明らかにしました。逆に言えば、これまであまり意識されなかった昔の国語教育を発見したんです。近代学校教育のなかにこれらの良い所を受け入れたい、そうぼくは思っているわけです。柳田さん編集の教科書や、国語教育関係の著作、子供向けの著作を「柳田国語科」と位置づけて、その良い所を教育実験の課題にしていきたいと思っています。

(7) 仮説実験授業との出会う —— 自分で単元が作りだせるか

柳田さんが亡くなって以降、ぼくは柳田さんの資料を集めたり民俗学の書物を読んだりしていましたが、そこに上廻昭(かみさこあきら)という人がぼくを「仮説実験授業」に誘ってくれたんです。当時成城の理科教育は、「遊び」「散歩」そして生物分野の経験学習はかなりやっておりました。こういうところに、上廻さんが「仮説実験授業を一緒にやらないか」と言ってくれたわけです。そこで板倉聖宣(いたくらきよのぶ)という人に会いました。これまた、児童調査・社会調査なしで単元の出せる人でした。いやー、(柳田さん以外にも)いるんだと思いました。だから我々は専門領域を持たないと、ただ教育学やなんかをやったくらいでは単元などは出てこないのです。何を学習させるべきか、何を教えるべきか。方法やなんかは作れますから、肝心の中身、何を学習させるか、教育内容が大事です。自分の単元が出せるという一分野くらいは確立させたいものです。自分の好きな分野ね。

仮説実験授業というのは、科学の基本的概念・法則を、予想・仮説のもとに討論し、実験で決着をつけるというものです。ぼくはこれを、夜も寝ないで昼は昼寝、一升瓶を傍におきながら記録をとってほしい仮説実験授業の基礎理論は5年くらいで仕上げましたね。みなさんに今日お渡しした『仮説実験授業と認識の理論 増補版』(季節社)は、その成果の一部です。これ以前に、成城での子供たちに最初に仮説実験授業を試みたときの綿密にとった記録を打ち出したのが『仮説実験授業』(国土社)です。昭和40年のことでした。柳田さんが亡くなったのが昭和37年。

(8) 科学とは何かをガッテンする——自分の素晴らしさを見つける

ぼくは仮説実験授業をやって、科学・サイエンスとは何かということがわかったんです。それは板倉さんに訊いて合点して悟りを開いたのですが、「科学は相手の素晴らしさを見るんじゃない。科学者やだれかの素晴らしさを見るんじゃないくて、俺の素晴らしさを見つけるんだ」というものでした。だから授業記録は、「俺が考えられるようになった」という観点で記録を取ったのです。

いちばん成功したのは静力学の授業でした。すべての物には重さがある。これは近代科学を成立させた質量の概念ですね。重さがあるとは地球が引っぱることだ。物を落とすと落ちる。これは何で? 地球が引っぱるから。じゃ、なんで引っぱったあと、物は地面を突き抜けて落ちて行かないのか。そ

それは地面（地球）がヨイショと反力を出すから物は地面の上で静止する。地球は機械的物理的で自分の気持ちを持っていないから10グラムの力で押せば10グラム分の力でしか押し返さない。答えの出る世界なんです。力の原理です。これを知ってしまうと「浮力」「摩擦力」「滑車」「仕事量」そして「エネルギー」と繋がっていきます。ぼくがやったのは「摩擦力」あたりまでね。いやー、それは上手くいきました。子供の授業への歓迎度も成績もすごかったです。教育実験ですから予想をもって取り組みました。だから歓迎度が8割、成績は教えた分の8割はとる。8割ラインを成功とみなす、これでサイエンスができる、というふうにしたわけです。

（9）ソビエトを訪問して指摘される——仮説実験授業は時間がかかる

昭和40年、その頃ロシアはソビエト時代です。国交はありません。当時の日本社会党を通して日本の教育者と芸術家を10人ぐらい呼びたいという話がありました。三浦つとむさんが「お前行ったらどう」ということで行ってきました。そのとき板倉聖宣さんが、仮説実験授業とは何かを英文で一枚の文書にしてくれました。それと最初にできた『仮説実験授業』（国土社）をもって行ったんです。

あちらでは、全ソビエト科学アカデミーつまり総文部省だね、ここに行つてぼく渡したんですよ。マルクシ・ウェーチという人に、あちらの数学者でした。そしたら英文の方をさらっと読んで、ぼくの本も、実験した結果の表とか写真とかをさらさらと見てね、こう言いました。「すごく素晴らしい。これは非常にいいことです」と。なるほどソビエトが認めてくれるんかい、そう思ったら、「だが、ソビエトではやりません。一つは我々もすでにデューイの思想によって予想を立てて進める学習はやりました。あれは良いものです」と。第二番目がすごい。「第二に、これは時間がかかってしようがありません。だからやりません」と、こう言われちゃいました。ソビエトは（先進国に）追いつき追い越せと詰め込み教育はきちんとやっているから、こういう科学教育はやりません。こういう話でした。

ぼく、通訳の話を聞いていて、まあ、ちゃんと（弱点を）つくもんだなあ、ある意味感心しちゃったですよ。その数学者がもうすぐ自分の『数学教育論』ができるから、送ってあげますと言ったんですが、ついに送られてきませんでした。そのうちソビエトはつぶれてしまいましたね（笑）。

(10) 三浦つとむに教えられる——子供たちは論理の勝負をしている

そうか。仮説実験授業は、授業書を与え問題を読ませ予想を立て討論をして実験で決着つけるという進め方ですから、討論の時間をえらく喰うんです。とくにおしゃべりの好きな子供あるいは先生が発言を強要するようなクラスだと、一つの問題を2時間もやります。次の日まで続くこともあります。時間がかかるんです。だからある人は討論をやらないでサッサカ サッサカやって進めます。あとで討論をやったクラスとやらなかったクラスを、試験してみたところが、だいたい同じだったんです。(笑)

すると、何が違うのかということになります。それは論理力ですな。今日お渡しした『仮説実験授業と認識の理論 増補版』(季節社)の「増補新装版へのはしがき」に書いておきましたが、これを教えてくれたのは三浦つとむさんでした。板倉聖宣さんが三浦さんを連れて来てくれたんですよ。初めて会いました。それで三浦さんの奥さんと三人で帰ってきたんですが、電車では三浦さんと向かい合って坐りました。そしたら三浦さんはかなり大きな声を出して喋るひとでした。三浦さんは、「庄司さん、論理ですよ」とデッカイ声で言ってくれたんですよ。子供たちはただお喋りをしているんじゃないやありません。論理の勝負をしている。こう言ったんですな。そのあと、授業記録を三浦さんに送るとすごく飲んでくれました。

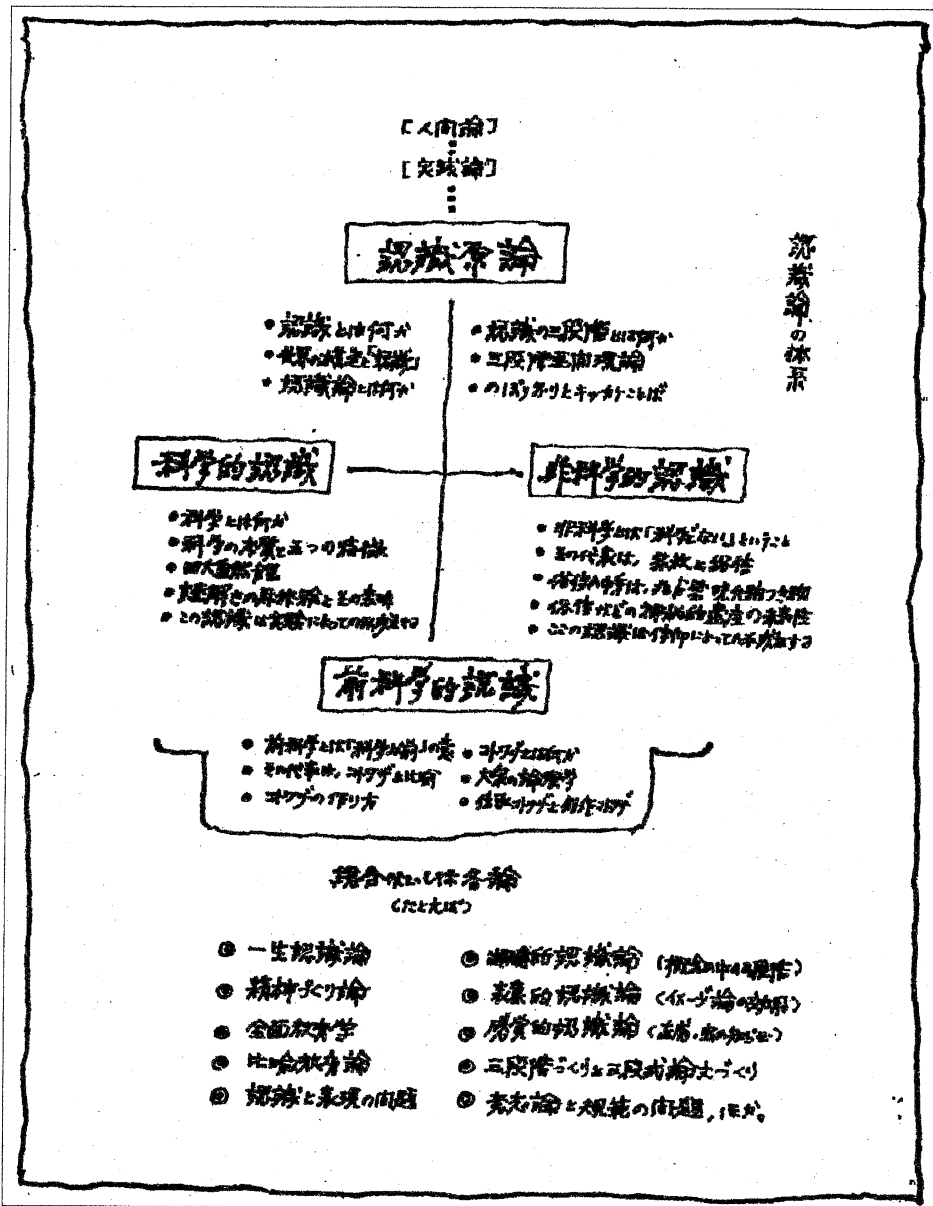
(11) コトワザ教育を始める——前科学的論理を自覚し、三段階理論へ

そしてこういう科学教育を研究しているうちに、それ以前の前科学段階の教育に目が向くようになったんです。すなわちコトワザ教育が始まっていくんですよ。コトワザは子供たちがすごく歓迎してくれました。その後、卒業した子のクラス会などに行ってみるとね、仮説実験授業よりもコトワザ教育の思い出の方を語ってくれますな。そのくらいコトワザというのはおもしろいもんです。

そこから科学、前科学の各段階がはっきりしてきて、成城の体験学習を宗教に置き換えそれを非科学と捉え直すと、<科学—前科学—非科学>となりそこから認識の三段階論を発見していくんです。それがレジュメの二枚目にある「認識論体系」となって出来上がっていくんです。

まず認識原論。これは人間論から始まります。人間は有限である。しかし、それを突破する限界突破力はすごい。これが実践論。人間の実践を後ろから動かしているのが認識だ。その認識のカラクリ。出来上がった科学的認識。

それに続く前科学的認識、非科学認識があります。これらは30年40年と看護学校での教育実験を経てだいたいよろしいということになります。いやちょうど時間が来ましたね(笑)。



(8) 次の世代の人たちへ——「変わります。世の中は諸行無常です」

ひとつ嘘をつくことも覚えながら、勝手なことをやっていった方がいいですよ(笑)。今の教育などこのまま続くとは思いません。今は乱世です。だから、創造的・独創的にひとのやらないことをやってみるということです。やれますよ。なに、指導要領が一番良いわけではありません。教育制度もこ

のままではありません。変わります。そこを柳田さんは、「変わりますよ。世の中は諸行無常ですよ」と教えてくれたんです。良かったねー。(笑)

(拍手)

司会 庄司先生ありがとうございました。わたしたちも初めて聞くお話がずい分ありました。聞いていて分からない名前がでてきて戸惑った方もおいでだとは思いますが、先生の著作等で補っていただければなと思います。では花束贈呈ということで、小林千枝子さんから先生にお願いします。(拍手)

小林 田舎から出てきたもので、プレゼントもあります。わたし、全面研の立ち上げメンバーに連れさせていただいた小林と申します。先生のお話を聞いて改めてわたしらしくやろうと思いました。それが先生に教えをいただいて、いまこうして教育学を教えている者にとってのわたしなりの検証なのかなと思いました。きょうはほんとにありがとうございました。また次回の30周年の集会までには、成長したいし、わたしらしく図太くありたいと思いました。また先生とお会いしたいです。花束贈呈 (拍手)



(2008/12/13 於 成城大学)

.....

編者註

- ・ どうしても聞き取れない箇所が数箇所あったので、文脈から解釈して適当と思われる言葉を選択した。
- ・ 庄司先生には申し訳ないことに原稿を見ていただく時間がなく、小見出しは、次の世代の人たちを考慮し、編者の理解力の及ぶ範囲で勝手につけさせていただいた。ご寛恕のほどを。
- ・ もし不適當、不都合な点があれば、すべて責任は編者にある。
- ・ ともあれ、庄司先生の笑顔がとてもすてきだ。(尾崎)